中村 藤吉 (Nakamura, Tokichi) 範士・日本主義者

文相荒木貞夫大将と中村教士

本書は一面で、この中村藤吉に捧げる記念碑的出版物でもあった。本書から中村の事跡を素描すると、つぎのようになる。福岡県浮羽郡田主丸町において明治二十年八月二十九日、父半三郎の長男として生まれる。幼児より古瀬善五郎について剣を学び朝鮮に渡った。後京都に上り、内藤高治や中野宗助に師事して、大正五年剣道三段の腕前。直ちに再度朝鮮に赴き龍山武徳館を設立して青年指導に当たった。昭和四年ハワイ経由にて渡米、北米武徳会を創立した。数回武者修業団を組織して帰朝し、同時にカリフォルニア・オレゴン・ワシントンの沿岸三州に剣道を広め、本書出版時点で六個連盟五〇有余の支部を建設、子弟一万を突破する成績を示した（弟子二万人説もあるにはあるが、一万が正しいと思われる）。大日本武徳会より教士号を拝受した。

昭和十二年帰朝し、帰朝後は東京市杉並区天沼町三丁目六四六番地に北米武徳会皇道学院を新設し、在米二世剣士を養成した。家庭には、妻ツネとの仲に二男二女（太郎・藤雄・栄子・日那子）があり、在米住居は本書発行元の隣り、すなわちラグナ街一七〇一番地に構えていた（本書五八四―五八五頁：六〇〇―六四〇頁等参照）。このうち、太郎は精進を積み重ねて、のちのちの全日本剣道選手権者（チャンピオン）にまで昇り詰めている。中村藤吉は、剣道の稽古の中で、特に礼節・儀礼・節度を重んじた。本書刊行当時、中村は北米武徳会総師範・北米皇道学院々長・大日本武徳会剣道教士の地位・身分・称号等をもっていた。

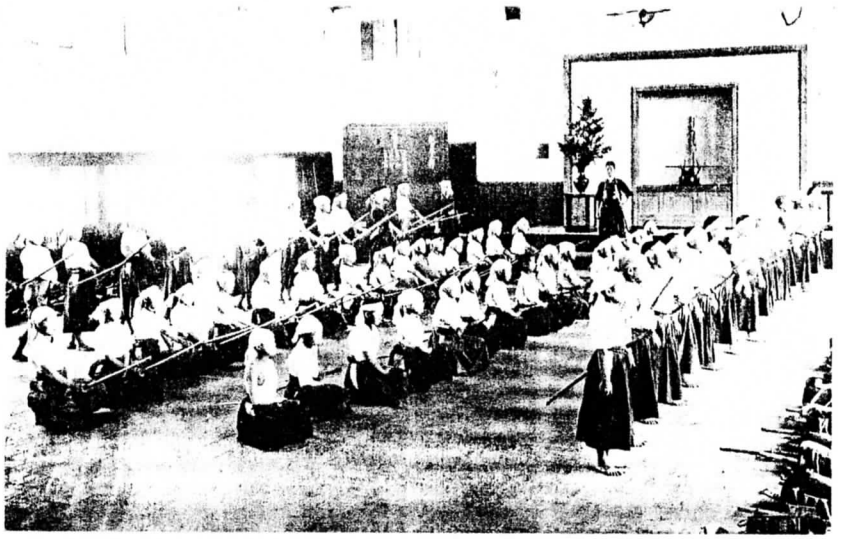
著作など：特に目覚しいものは見当たらず。

高野 佐三郎 (Takano, Sasaburo) 東京高等師範学校教授

高野佐三郎教授

高野佐三郎（一八六二―一九五〇）は、本書第五編 現代一流剣士略伝（三八五頁から始まる）のトップに名が出ている。高野の名がトップに出ているのは決して偶然ではなく、当代の高位剣道師範として君臨・存在していたからである。本人自ら本書に題字（揮毫）を寄せていた模様であるが掲載されていない。

高野は、東京高等師範学校教授であり文部省（剣道）試験検定委員・範士の肩書きで、代表作『剣道』（大正四年・復刻新版は昭和五七）と『日本剣道教範』（大正九年・昭和三年改訂再版・増補）を著わ



戦前日本国内の児童剣士（東京市立本所高等小学校生徒剣道基本教授練習の図）

している。両書共に良書普及会から発行された。前者の場合、題字に勝安芳・東郷平八郎・大浦兼武（大日本武徳会会長）らの名があり、序には、九鬼隆一・渋沢栄一・奥田義人・嘉納治五郎等々の名が並んでいる。後者は、中等学校・軍隊・青年団等において剣道を教習する者のための教科書または参考書で、記述の特色は団体的に多人数一切に教授する方法にあった。高野流「剣道基本教授法」を考案して、東京高等師範学校付属中学校生徒に教えたことでも知られる。〈賜天覧〉の三文字が扉にみえる。南満州鉄道株式会社剣道師範として名高い高野茂義（旧姓・佐野：一九一二年代の早稲田大学剣道部師範）は、高野佐三郎の養子である。共に「小野派一刀流」。昭和九年五月皇太子（現平成天皇）御誕生奉祝武道大会審判員拝命。

伝記：『伝記・高野佐三郎』埼玉県立文化会館編　一九六二　三一二頁［新序文を加えて復刻版：伝記叢書：三七・大空社・昭和六十三］

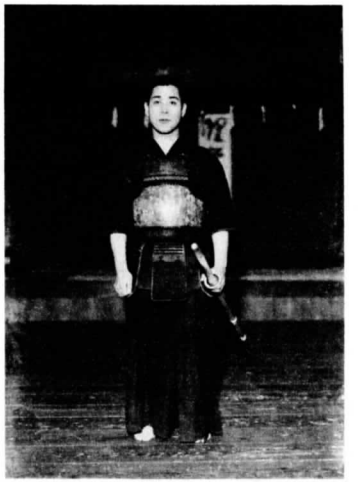
本書との関係：剣道範士として「題字」（揮毫）を寄せる。（実際には載っていない）

森 寅雄（Mori, Torao）　範士・国際主義者

森寅雄は一九一四年（大正三年）六月十一日岡田善次郎とヤス（野間）の四男として、群馬県桐生市に生まれた。九人兄弟の四男である。外国に永く住んでいると、このようなあっぱれな先達が我が同郷にいたことを知って、頼もしく思う。岡田は野間家に養子婿として入った人物であるが、義兄に野間清治がおり、清治が起業した〈大日本雄弁会講談社〉の大スポンサーとして知られる。寅雄が「野間」から「森」姓になった経緯は、早瀬利之の『タイガー・モリと呼ばれた男――幻の剣士・森寅雄の生涯』（スキージャーナル株式会社刊）に、かなり詳しい。

森 寅雄 範士

森寅雄は剣道で名高い巣鴨中学校を卒業すると、伯父の野間清治が社長をしている報知新聞社に入社し、記者の見習いや新聞発行業務に携わった。この人事は他でもなく、野間社長の後継者を育てる目的であった。だが、森は何故か北米への船出を選択・決行する。森寅雄が剣道普及のため米国に来るのは、戦前の一九三七年一月と、戦後の一九五〇年夏である。森には昭和十年に前橋十五連隊に入隊した軍歴があり戦地体験もあるが、これが米国側で大した問題となっていない。一方、戦時中に森や彼の家族が「米国帰り組」として、特に日本軍部からマークされた形跡もない。夫人が「米国生まれ」であったので、肩身の狭い思いを感ずる事は避けられなかった。



光輝満てる森寅雄剣士の四面相
（初公開写真・講談社提供）

森の場合は戦時を別として、戦前・被占領下・戦後とかなり恵まれた人生が開けていたといえるだろう。戦前に自分の名を売って帰国し、被占領下では米兵相手のバーを経営し、戦後はいち早く渡米し、この地で二つも三つも人生に花を咲かせているからである。広い意味での、国際人・ビジネスマン・教育者の顔を一人占めにし、終始日系人と米国市民の間に明るいニュースを提供した。米国市民の胸の内には、森寅雄の名は、オリンピック・ローマ大会に米国フェンシング・チーム監督として出場した人として、この世紀を越えて永く生き残るであろう。一九六九年（昭和四十四年）一月早々、森は道場内で稽古中に心筋梗塞により倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。妻貞子との間に二児あり。享年五四歳（本書五八五頁をも参照）。

編著：Muriel Bower [and] Torao Mori.
Fencing. Dubuque, Iowa, W. C. Brown Co. 1966. vii, 72 p. illus. 23 cm. (Physical education activities series)
【森寅雄の肩書き：初版（1966）Retired Coach, Los Angeles Athletic Club, President United States Kendo Federation
第二版（1972）Mori Fencing Academy, Beverly Hills】

伝記：『タイガー・モリと呼ばれた男――幻の剣士・森寅雄の生涯』（早瀬利著・スキージャーナル株式会社刊　平成三年　二九〇頁）

本書との関係：最少年齢にして剣道錬士の肩書きで「序文」を寄せる。同じく本書に「序文」を寄せている野間清治（大日本雄弁会講談社社長）は、森と親戚関係。